

令和元年六月投句

城址の百足虫と水城見下ろしぬ

六月の月熟るゝかに山の端に

ががんぼの足だけ残るガラス窓

節子

紫陽花の参道に傘またひとつ

真理子

頼りなく厨を歩く子蠅螂

夾竹桃褒められもせずなほ元気

声援に応へる鵜匠目は向けず

残鶯や夕日の端に鳴きつくす

焼酎の襖に匂ひ立つ実梅

勝利

暮れがての紫陽花山にサキソフォン

由紀子

拝殿の裏は物置宮祭

白ばかり浮立つ夜の菖蒲池

残鶯や日々穏やかにとぞ願ふ

慈しみ日々過ごせるや額の花

光子

明易や眠る菓を飲みをれど